



©まなびの広場 令和8年2月10日発行  
偶数月10日発行  
令和4年6月10日創刊 通算No.23

# まなびの広場

— 子どもの未来を共に考える —

VOL.23

2  
2026

## 編集よりご案内

本号で最終回を迎える明和政子氏の連載では、幼児期の脳の発達と腸内環境の関連についてご執筆いただきました。

園の教育の質を高める手法でもあるECEQ<sup>®</sup>について、以前より継続してECEQ<sup>®</sup>実施園の声やコーディネーター養成の報告をお知らせすることに加え、新たに令和8年度よりECEQ<sup>®</sup>を第三者評価位置づけることにいたしましたので、その一報をお届けいたします。

さらに、広報委員による多くの方に知ってもらいたい絵本を選考した、「第17回ようちえん絵本大賞」の受賞作品を紹介いたします。

## CONTENTS

短期連載 ⑤

AI時代を生きる子どもたちへ

■ 明和 政子氏 (京都大学大学院教育学研究科 教授)

(一財)全日私幼研究機構理事長からのご報告  
デジタル社会と向き合う乳幼児教育の願い

■ 安家 周一 (一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理事長)

子どもたちの育ちを支える教職員の学びを支える研修の意義

■ 川原 恒太郎 (一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 オンデマンドチーム長)

ECEQ<sup>®</sup>実施園からの声～ECEQ<sup>®</sup>の旅で手にしたもの

■ 藤井 教証 (一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 ECEQ<sup>®</sup>・評価チーム 神辺千鶴幼稚園 園長)

ECEQ<sup>®</sup> Hot News Vol.6

ECEQ<sup>®</sup>コーディネーター養成講座Ⅳの開催報告

第17回ようちえん絵本大賞～新しい絵本を見つけよう～

機構の活動報告・お知らせ

令和7年度全国教育研究担当者会議の開催／

第17回幼児教育実践学会の開催案内

# 科学的エビデンスが示す幼児教育の重要性

京都大学大学院教育学研究科 教授／明和 政子

今回で、この連載もいよいよ最終回となりました。今回は、私たちの研究室がいま特に注目している研究テーマ、幼児期の脳の発達に影響する腸内環境や食生活習慣についてお話しします。

## 幼少期の感情制御は生涯にわたる心身の健康を予測する

現代の日本社会では、生きづらさを抱える子どもが増え続けています。とくにコロナ禍以降、小・中・高校生の心身の健康状態は悪化の一途をたどっています。自殺者数の増加、不登校を選択する子どもの急増とその低年齢化が深刻な社会問題となっています。さらに、大学生や若者世代においても心の不調は年々深刻さを増しています。こうした背景には、将来の見通しが立ちにくく、変化が激しく、不確実性と複雑性が高い社会、いわゆる「VUCAの時代（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）」の影響があると考えられます。

不確かな日常を生きる次世代にとって、自身の感情を適切に調整する力、「感情制御」能力を育むことは喫緊の課題です。とくに、感情制御の脳内基盤が幼児期に集中的に形成されることを考えると、幼児教育に期待される役割はこれまで以上に大きなものとなっています。

感情制御の発達は、個人が生涯にわたって心身ともに健康に生きられるかどうかを予測する、重要な指標であることが明らかとなっています。実際、3～4歳の時点で感情制御の発達にリスクを抱えていた子ほど、その2～4年後（就学期）に問題行動を示すことが報告されています。具体的には、過度な不安や恐怖、抑うつ、社会的引きこもりといった内在化問題行動、あるいは攻撃性、非行、かんしゃく、多動性などの外在化問題行動が生じやすくなります。さらに、就学期にみられる問題行動は、思春期以降の精神疾患発症リスクと密接に関連していること、さらには成人になってからの社会経済的地位や心身の健康状態をも予測することが示されています。

## 感情制御の発達を「腸内フローラ-腸-脳」軸でとらえる

現行の発達支援は、子どもたちの感情制御に実際に問題が生じてからカウンセリングや薬物療法に頼るアプローチが主流です。しかし、子どもたちが苦しむ前に、その苦しみを自ら周囲に伝える前に、心身の不調やリスクを予測し、未然に防ぐためのアプローチを創出するこ

とが、私たち基礎研究者の役割だと思っています。

実際、世界ではこうしたアプローチが最先端科学を活用して大きく前進しています。その最前線にあるのが、私たちの身体の内側に存在する環境、すなわち「腸内環境」から子どもの身体、脳と心を守る取り組みです。私たちは緊張するとお腹が痛くなったり、安心すると満腹感や温かさを感じたりします。感情とは、脳-腸の絶え間ない双方向のやりとりにより生じるものです。就学前から感情制御の発達リスクを検出し、早期に介入・支援を行うことができれば、その後に生じる問題行動や精神疾患のリスクを予防、低減できる可能性があるのです。

もうすこし具体的に説明しましょう。脳は、腸とホルモンやサイトカインなどの液性因子や自律神経系を介して、双方向的に情報をやりとりしています。この関係は

「脳-腸」相関とよばれています。さらに、腸内に生息する微生物がこの相関に深く関与することが明らかとなり、現在では「腸内フローラ-腸-脳」相関として理解されています。感情制御を司る脳の発達は、腸内環境の影響を受けている可能性が高いのです（図1）。

図1 「腸内フローラ-腸-脳」は互いに影響し合って機能している。個人が生涯もつことになる腸内フローラの原型は就学期までにつくられる。

## 個人の腸内フローラの原型は就学期までにつくられる

実際、生後早期の腸内フローラは、その後の問題行動と関連することが報告されています。例えば、1歳までの腸内フローラにみられるα多様性（菌種の豊富さや均等度）の低さや短鎖脂肪酸産出菌の相対量の少なさは、その2～3年後に問題行動の臨床診断を受ける割合の高さや問題行動の頻度と関連しています。

ここで重要なことは、ヒトの腸内フローラは生後3年間で環境の影響を受けながら劇的に変化し続けることです。3～4歳ごろには成人レベルに達し、個人が生涯もつことになる菌叢が安定化するのです。そこで、私たちの研究チームは、腸内フローラと感情制御がともに著しく発達する幼児期に焦点をあて、腸内フローラ-腸-脳軸の観点から研究を進めてきました。その成果のひとつをご紹介します。

## 幼児期の感情制御リスクは腸内フローラと関連する

私たちは、3～4歳の日本人幼児257人を対象とした横断的研究を行い、この時期の感情制御の発達リスクが腸内フローラと関連することを明らかにしました。感情制御の発達に困難を抱えるリスク群では、対照群と比較して、身体の炎症と関連する菌属（例：Actinomyces、Sutterella）の相対量が高いことがわかりました（図2）。

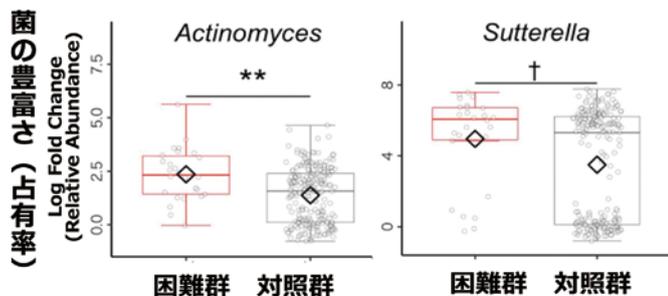


図2 幼児期における感情制御の困難（リスク）群と対照（リスクなし）群の各菌の占有率（Fujihara et al., 2023）

これらの菌は、炎症性腸疾患などの身体疾患や、血中の炎症指標（サイトカインなど）の上昇と関連することが知られています。成人を対象とした研究では、腸内の炎症が脳内の炎症と関連すること、また炎症関連菌の豊富さが、うつ病や不安障害などの精神疾患と関連することが報告されています。これらの知見をふまえると、幼児期における感情制御の発達リスクにも、炎症関連の腸内フローラが関与している可能性があるのです。

さらに重要な点として、感情制御の発達にリスクを抱える幼児の食習慣を調べてみたところ、1週間あたりの緑黄色野菜の摂取頻度が低く、偏食の割合が目立って高いこともわかりました（図3）。この結果は、感情制御の発達と腸内環境、そして日常的な食習慣が互いに関連していることを示しています。

なお、この研究については現在も調査を継続しています。現時点で明らかになってきた重要な点として、3～4歳時点における感情制御の発達リスクと腸内フローラの組成という2つの因子を組み合わせることで、その子が2年後（5～6歳）に示す内在化・外在化問題行動のリスクを精度高く予測できる可能性がみえてきています。

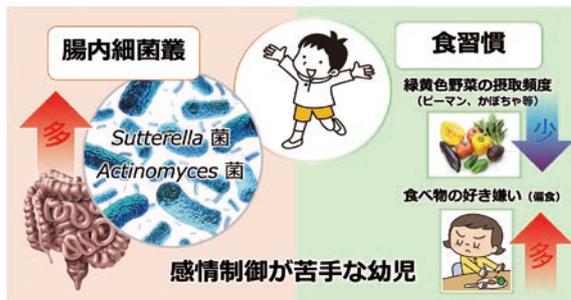


図3 幼児期の感情制御の発達リスクは腸内フローラおよび食習慣と関連する

## おわりに

乳幼児期は、脳と腸がともに環境の影響を強く受けながら可塑的に変化する「感受性期」にあたります。すなわち、科学的エビデンスに基づいた生後早期からの介入や支援法、教育実践は、個人の将来にわたる心身の不調や機能不全を未然に予防、リスク低減しうる有効な医療的・予防的アプローチとなる可能性が高いのです。

今後の課題は、食生活習慣の見直しや腸内フローラへの働きかけ（プロバイオティクスやプレバイオティクスなど）が、感情制御の発達に関わるリスクを実際に改善し得るのかを、長期的かつ縦断的に検証していくことです。こうした基礎的知見の積み重ねによって、幼児教育は、医学や神経科学を基盤とする新たな実践へと発展していくでしょう。

\* \* \*

全3回の連載を通じて私がおもってもお伝えしたかったことは、「今・ここ」を生きる大人の価値観や欲望のまま利便性や省力化を追い求めるあまり、ヒトの脳と心が発達する環境条件そのものを変えてしまうことは、人類の持続的な発展に深刻な影響を及ぼしかねないということです。

この地球上にホモ・サピエンスという生物が誕生して以来、ヒトの脳と身体の基本構造は、ほとんど変わっていません。にもかかわらず、私たちを取り巻く環境は、未曾有の変化を遂げています。AI共生時代を迎え、生物としてのヒトがもつ脳と心をいかに健やかに育てていくことができるのか。本連載が、その問いを社会に投げかけ、議論を広げる一助となること、そして次世代の育ちに必要な幼児教育の発展に向けた羅針盤となることを、心より願っています。

**保育施設  
導入実績 No.1**

**IP無線機 伝シリーズ**  
— ニシハタシステム —

**災害対策**で  
**2,500**園以上が導入!

**園業務のお悩みを  
IP無線機で解決!**

無料お試し実施中!

**0120-775-956**  
株式会社 ニシハタシステム

# デジタル社会と向き合う乳幼児教育の願い

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 **安家 周一**



親しい大学の教授から先日聞いた話です。卒業論文のシーズンとなり、学生から寄せられる論文を読んでいると、明らかにAIの文章らしきものばかりで、ほとほと嫌になる、という嘆きです。ここ1年くらいで私たちの周りに人工知能のあらしが吹き荒れています。という私も、自分の書いた文章の校正をAIに依頼したこともあり、人のことは言えませんが、AIの校正はある意味的確なのですが、まったく私らしくない文章となってしまう、とてもがっかりさせられました。決して私の文章がいいというわけではありません。人間が書いたとつとつとした文章が、簡素になりすぎてしまっていることに残念な思いを強く感じています。一方、会議などの議事録をAIに託した場合、当然ながら意味の取り違いや誤植はあるにせよ、少し修正すれば議事録として通用するもので大変楽になるという面もあり、ある意味仕事ははかどります。

人工知能学会会長の栗原聡さんが「アンコの詰まっていない巨大な薄皮まんじゅう」とAIのことを表現されているように、人工知能を使いこなすには、人間側の知識能力や倫理観など、広範囲なリアリティーや実体験、他の人への影響や関係性など、深い知恵や知識が要求されます。人工知能を使いこなすためのそれらの力を身につけるためには、旧来から大切にされている五感（嗅覚・味覚・触覚・聴覚・視覚）などの人の感性や体の動きを司る運動神経、体幹、筋肉の動きなどの基礎的な力も含め、かなりの準備が必要になることが分かります。このような力は、乳幼児期から不便・不足・不快・不潔に象徴される人間が生きるという、リアルな体験がとても重要となるのです。

私たち現代人はすでにデジタル社会の波に呑み込まれています。電車に乗って乗客の様子を見てみると、ほとんどの大人はスマホの画面に首っただけです。文章なども片手で、とても速いスピードで画面を操作し、発信しているようです。このような生活を続けていると当然では

ありますが、いざ手紙を書こうとしても漢字は思い出せず、すぐにスマホで調べなければならなくなっていますし、すでに他の人の電話番号はほとんど忘れていきます。方角でさえ、どちらが北で東はどっちか、スマホに教えてもらっています。まさに人間が無能にされてしまっている現状に対して、何の疑問も持たないこと自体に恐怖を感じてしまいます。便利なスマホが悪いわけではないと思いますが、人間が従来培ってきた、様々な能力が無力化してしまっている現状を恐怖に感じないことが恐ろしいのです。

中学生がAIで同級生女子の写真を性的ディープフェイク（偽の画像）に加工し他の生徒に販売していた、小学生がオンラインカジノの泥沼に陥ったなど、信じられない殺伐とした出来事が私たちの周りで起こっています。GIGAスクール構想の掛け声で全員に配られたタブレットでSNSが気になりすぎて勉強が手につかない、ゲームに没頭し昼夜が逆転してしまい学校に通えなくなる生徒が続出してしまった、などの報告も先進諸国から寄せられています。まさにデジタル技術に子どもが壊されている現状です。

幼保小の橋渡しの号令が発せられています。小学校の間口に子どもを合わせるのではなく、子どもの実相に合った小学校の環境を創り出してほしいと願います。私たち乳幼児教育の根本は「生活とあそび」が大切にされた、答えが一つではない環境による教育です。こんな時代だからこそ、子どもが自らの感情や身体感覚を頼りに、自分は何者か、何がしたいのかを考えることこそが個人の主体性の育成に必要です。一人一人の特性をしっかりと見極め、地に足の着いた豊かな保育に心して取り組まなければなりません。

### 引用文献・参考文献

日本経済新聞2026年1月5日朝刊記事 栗原聡 慶応義塾大学理工学部教授  
「歩く」マジで人生が変わる習慣 池田光史著 NewsPicks Jパブリッシング

**園児の床**  
床メンテナンス・張替え対応

あらゆる技術で、園の床に起こるさまざまな課題を解決!

施工メーカーだからこそその安心安全の技術  
対応エリア全国

安全 健康とケガ(ササクレ)のリスクに備える ※コーティング種類による  
歩きやすく転びにくい**ノンスリップ仕様**

負担減 **清掃負担軽減** **維持費負担軽減**  
日々のワックスがけは時間的にも体力的にも負担がかかりますがコーティング施工済みの床なら職員の方の清掃やメンテナンスの負担を軽減できます。

**園舎診断アプリ**

園舎管理もプロにアウトソーシングする時代!  
園舎管理を「属人化」から「仕組み化」へ

修繕計画のセカンドオピニオンとして活用しませんか? /

令和7年度 積極受付中

園舎管理 保育DX

株式会社 エコテック

株式会社 エコテック

フリーダイヤル  
0120-963-093

全国対応

eep 園児の床 HP

# 主体的に学び続けられる研修体制の構築を目指して

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 オンデマンドチーム長／川原 恒太郎

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構は、乳幼児期における子どもの豊かな育ちを支えるため、教職員が生涯にわたり主体的に学び続けられる研修体制の構築を目指しています。近年、幼児教育・保育の無償化や少子化の進行、社会情勢の急速な変化を背景に、園や教職員には、これまで以上に質の高い教育・保育の提供が求められています。

こうした状況を踏まえ、当機構が示した令和8・9年度（2026・2027）教育研究課題主題「創りだそう！こどもの未来を拓く、良質な乳幼児期の教育を届けよう！こどもと共に生きるよこびを」には、変化の激しい時代を生きる子どもたちの幸せのために、私たち教職員等の役割を改めて問い直し、未来を拓く子どもたちをどのように導き、支えていくのかを考えていかなければならないという想いを込めています。日本全国、各地区・各地域の実情に応じて教職員等が学び続けることこそが、子どもたちの幸せにつながると信じ、この教育研究課題をオンデマンド研修の趣旨として掲げています。

当機構では、さまざまな研修形態を取り入れ、「聴く・見る」「体験する」「対話する」ことを通して学ぶ中で、実感を伴う理解や新たな価値観の創出、学びの広がりが生まれるような、立体的な研修体制の構築を目指しています。その一つの手法が、オンデマンド研修を活用した研修体制です。従来の集合型研修に加え、個人の学びと園内研修を有機的に結びつけることで、知識の習得にとどまらない、対話や実践を通じた深い学びを実現し、園全体の教育力向上につなげることを目的としています。現在、113の研修コンテンツを2月末まで配信しています。

この配信にあたっては、都道府県団体の皆様にオンデマンド研修の趣旨をご理解いただき、良質なコンテンツをご提供いただいております。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

研修履歴の蓄積は、教職員個人のキャリア形成や処遇改善等加算への対応にも資する重要な要素です。令和8年度のオンデマンド研修では、「保育者としての資質向上研修俯瞰図」に沿った研修をはじめ、都道府県団体が全国の教職員等に受講してほしいと考える研修、季節や園の実情に応じたテーマ設定により、実践に活かしやすい学びを提供しています。

さらに、これまでの受講アンケートや傾向分析を踏まえ、教職員が自ら学びたい内容を自由に選択できる「学びのプラットフォーム」の充実を図ります。初任者から園長、ミドルリーダーに加え、看護師、栄養士、調理師、事務職員、バス運転手など、多様な職種を対象とした幅広いコンテンツを準備していきたいと考えています。

オンデマンド研修を通して、教職員一人ひとりが課題意識をもって学び続け、自身の役割を問い直し、保育者としての誇りを胸に、教育の本質を見失うことなく、子どもの未来を拓く良質な教育と環境を創りだす一助となることを願っています。そして、当機構として子どもの幸せと園の質の向上、さらには地域に開かれた教育の実現へとつながる研修となることを目指してまいります。

現在配信中の113の研修コンテンツについて、詳しくはこちらをご覧ください。

申込期間：

2月26日（木）17時まで

配信期間：

2月27日（金）17時まで



令和8年度も多様な研修コンテンツを配信する予定です。

配信の開始にあわせて本紙でも研修コンテンツのお知らせをしてまいります。

▽令和8年度研修コンテンツ配信開始日

第Ⅰ期 令和8年3月2日（月）

第Ⅱ期 令和8年6月1日（月）

第Ⅲ期 令和8年12月1日（月）



## ECEQ<sup>®</sup>のすすめ

4回にわたり、ECEQ<sup>®</sup>実施園からECEQ<sup>®</sup>を実施する中での気づきやその後の変化についてご執筆いただきましたが、本号で最終回となります。本号では園の改革に取り組む中で、ECEQ<sup>®</sup>を実施しようと思ったきっかけと実施したからこそ全国の園に伝えたい思いについてご執筆いただきました。

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 ECEQ<sup>®</sup>・評価チーム  
神辺千鶴幼稚園 園長／藤井 教証

昨年、広島県では5年ぶりに7園目となるECEQ<sup>®</sup>公開保育を行いました。県の幼稚園連盟には約200園が加盟しており、決して少ない数ではないのですが、園の質を高める取り組みがなかなか広がらないのはなぜなのでしょうか…。

6年前、自園の保育を変えたいと思い立ち、事あるごとに「今、本当に必要なもの」と「なくてもよいもの」を精査してきました。広い園庭があり、職員同士の関係も良く、対話を重ねながら試行錯誤できる土台は整っていると信じ、新たな保育の形づくりに取り組んできました。保育者とともに他園を見学したり、県の教育アドバイザーに相談したりしながら5年が過ぎ、理想の保育に近づく一方で、選択の判断が難しい場面と何度も向き合ううちに、気づけば園の方針とぶれていたということが増えてきました。保育の奥深さを感じると同時に、自園だけで進める改革には限界があることも見えてきました。

快く自園を公開してくださる園の多くは、園の実態に合った理念や方針が明確に言語化され、経営者と保育者が一体となって語り合える基盤が整っていました。また、拝見したECEQ<sup>®</sup>認定証も好印象でした。これからの自園を考えるうえで、私たちにはない視点や外部からの評価が必要だと感じ、ECEQ<sup>®</sup>について調べましたが、県内での認知度は低く、知っている方からも「良いけど時間が…」「大変そう」といった声が多くありました。それでも私たちは次の段階を目指し、自分たちのしてきた保育を評価していただきたいという自信と、新たな気づきへの期待、そして大変かも…という覚悟をもってECEQ<sup>®</sup>を申請しました。

実際にECEQ<sup>®</sup>を進める中で生まれた新たな気づきや課題は、5つのSTEPがあったからこそその賜物でした。参加した保育者たちは、自身の保育への思いと向き合い、悩みを問いにして考える中で、一つひとつの保育活動に意義を見いだせました。また、「なぜ?」「どうして?」と保育者と一緒に振り返ることで、自園で進める改革の方向性が見え、自分の役割にも気付くことができました。ECEQ<sup>®</sup>は機構が、幼児教育の世界に深く身を置く機関だからこそ得られた成果であったと思います。保育の質を高め、ときには“改革”とも言われる取り組みに踏み出すことは、大きな勇気があることかもしれません。日々の業務で精一杯の園もあるでしょう。ですが、ECEQ<sup>®</sup>の目的は、自園の仲間を増やし、公開保育を利用した現状からの脱却とも言い換えることができると思います。自ら出向かなくても、多くの意見や考えを聞けるこの仕組みを、活用しない理由はないのではないのでしょうか。

現在、日本の幼児教育をリードする多くの園がECEQ<sup>®</sup>に取り組み、その普及に力を注いでおられます。しかし、いざECEQ<sup>®</sup>を導入したいと思っても、関係各所の理解や支援が得られない地域では進めにくいのが実情です。そのような地域で、「自園を良くしたい!」「ECEQ<sup>®</sup>に取り組みたい!」と思う方がおられれば、周りの園の方々にはぜひ応援し、声を上げていただきたいのです。それこそが、その地域の子どもたちの幸せ、そして未来につながる行動だからです。今回取り組んだECEQ<sup>®</sup>は、99%の園が「やってよかった」と評価しているように、私たちにも多くの“気づき”をもたらしてくれました。まだ取り組まれておられない皆様にも、この感動をぜひ味わっていただきたいと願っています。



STEP3 問いづくりの様子



STEP4 分科会の様子



# Hot News



Vol.6

## ECEQ<sup>®</sup>の新たなステージ 「第三者評価としてのECEQ<sup>®</sup>」

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構  
ECEQ<sup>®</sup>・評価チーム長／藪 淳一

誕生して13年。このたび、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が開発したECEQ<sup>®</sup>は新たなステージに立ち、令和8年度より、第三者評価と位置付けることにしました。

### ① ECEQ<sup>®</sup>の現在位置

令和6年度末で、ECEQ<sup>®</sup>の実施園は406園、さらに令和7年度も60園が実施しています。令和元年度と2年度に実施されたCEDEP（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター）の調査では、ECEQ<sup>®</sup>実施園の保育者の約99%が「やってよかった」と回答していますが、ECEQ<sup>®</sup>の良さは確実に浸透してきていると言えます。

### ② 質と評価の時代

国立教育政策研究所は、日本の幼児教育の文化・文脈を踏まえた質評価スケールの作成と検討が必要との認識から、「幼児教育における保育実践の質評価スケール案」を開発しました。現在は、第三者評価を主たる目的としたものではなく、「研修の場で保育実践を捉えたり振り返ったりするための観点の一つとして提示」されていますが、この質評価スケール案が、保育そのものの改善に資する評価のあり方の検討や、評価スケールを活用する評価者の育成の動きなどを加速させていくことが想定されます。

また、令和6年12月にこども家庭庁から発表された「保育政策の新たな方向性」では、「保育の量の拡大」から「保育の質の確保」への転換が示されています。この質へのシフトの具体策には「第三者評価等による質の評価・改善の推進」も挙げられています。待機児童という言葉がほぼ聞かれなくなった今、文部科学省だけではなく、こども家庭庁も保育の質について言及するようになったことは、まさに質の時代、評価の時代の扉が正面から開かれようとしていると言えるでしょう。

### ③ ECEQ<sup>®</sup>が第三者評価である根拠

ECEQ<sup>®</sup>が第三者評価である根拠の一つが、「幼稚園における学校評価ガイドライン」（文部科学省・平成23年改訂）です。このガイドラインでは、第三者評価の具体的な実施体制の一例として、「一定の地域内の複数の学校が協力して、互いの学校の教職員を第三者評価の評価者として評価を行う」と示されています。これに該当するのがECEQ<sup>®</sup>のSTEP4で、公開保育の参加者を評価者と捉えることができます。また、ECEQ<sup>®</sup>の「問い」は、実施園の保育者自らが設定した評価項目と考えられます。

### ④ 第三者評価としてのECEQ<sup>®</sup>の実際

令和8年度は、ECEQ<sup>®</sup>を第三者評価として取り扱うことを希望する場合、実施申請とは別に第三者評価契約書を取り交わすこととなります。また、最終的にECEQ<sup>®</sup>コーディネーターが第三者評価報告書を作成します。（報告書作成費用は1万円。ECEQ<sup>®</sup>実施の管理費とは別。）ECEQ<sup>®</sup>と第三者評価に関する情報は、各都道府県団体とECEQ<sup>®</sup>コーディネーター資格保有者に、1月末に説明文書を送付しています。また、2月末をめぐって説明動画を配信する予定ですので、詳細は、各都道府県団体や機構のECEQ<sup>®</sup>・評価チームのメンバー等にご確認ください。

ECEQ<sup>®</sup>の実施園が増えること、そして第三者評価実施園が増えることは、各園、各地域の幼児教育の質向上につながるだけでなく、より質の高い幼児教育を目指してたゆまぬ努力を続ける私立幼稚園・認定こども園の社会的価値を高めることにもなります。日本独自の評価システムのECEQ<sup>®</sup>へのご理解、ご協力、今後もよろしくお願いいたします。

私たちは幼児教育用品を通じ、幼児教育の質の向上に貢献します。

Gakken



フレーベル館



JAKUETS



# ECEQ<sup>®</sup>コーディネーター養成講座Ⅳの開催報告

令和7年度はECEQ<sup>®</sup>コーディネーター養成講座を73名に受講いただき、対面の講座Ⅳを大阪、東京、北海道の3会場で開催いたしました。そのうち、大阪会場の開催の様子を主催者からの開催報告に加え、受講者にとってどのような学びがあったのかをご執筆いただきました。



令和7年12月2日に開催された 東京会場の様子



令和7年12月8日に開催された 北海道会場の様子

## 主催者より

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 ECEQ<sup>®</sup>・評価チーム 杉本 圭隆

令和7年11月17日(月)、大阪私学会館にて「ECEQ<sup>®</sup>コーディネーター養成講座Ⅳ」が開催されました。本講座は、事前学習と当日の午前講義で理論や目的を再確認し、知識の土台を固めることから始まりました。それらを踏まえて、受講者の皆さんが最も熱心に、そして悩みながら取り組んでいたのが、午後の時間をたっぷり使った「STEP2」の実践演習です。西日本地区を中心に集まった25名の先生方が、対面ならではの熱気の中で正解のない問いに向き合いました。

演習の題材は、架空のモデル園「きこう幼稚園」です。「職員仲は良いが、多忙ゆえに会議が報告のみで終わっている」というリアルな課題や、園長と現場の温度差を投影した設定としました。受講者の皆さんは、この設定のもとで「コーディネーター役」と「園側の職員役」を交互に体験しました。

ワークが進むにつれ、受講者の皆さんが立場を「行き来」することで、コーディネートを手単なる手法ではなく「自分ごと」として捉え直していくプロセスが強く印象に残りました。「園の職員」として席に座った時に感じる、

## 受講者より

主に西日本地区の先生方を対象としたECEQ<sup>®</sup>養成講座Ⅳ(大阪会場)を受講しました。講座前半では、事前に動画で学んでいたECEQ<sup>®</sup>の各ステップについて、その目的や留意点をあらためて整理し、説明していただきました。①トップライダーへの聞き取り(STEP1)から始まり、②ワーク等による園の現在位置の確認(STEP2)、③問いの設定(STEP3)、④公開保育(STEP4)、そして⑤公開保育の振り返り(STEP5)に至る一連の流れを通して、ECEQ<sup>®</sup>が単なる手法ではなく、園が自らの力で前進していくためのプロセスであることを再認識しました。各地区のECEQ<sup>®</sup>・評価チームの先生方による実際の映像や事例を交えた説明からは、理論と実践の積み重ねの重みが伝わってきました。

また、講座後半ではSTEP2を想定し、コーディネーター役と保育者役(学年リーダーや1年目など、経験年齢別)に分かれて田の字ワークのロールプレイを行いま

本音を話すまでの躊躇や言葉にならないもどかしさ。そして、それを「受け止めてもらえた」と感じた時の安堵感。その感覚を肌で知ること、再びコーディネーターの席に戻った際、沈黙を埋めることよりも「待つ」ことの重みや、板書にあった「非操作・非評価」の意味が、理屈を超えた実感として腑に落ちていく様子が、会場の空気から伝わってきました。

会場では、役になりきって語り合う姿や、園自らの言葉が出るのをじっと待つ真剣な眼差しがあちこちで見られました。私たちECEQ<sup>®</sup>・評価チームはスーパーバイザーとして各グループを見守りましたが、受講者が悩みながらも「園の等身大の思い」に辿り着こうとする姿を尊重し、あえて答えを提示せずそのプロセスを共にしました。

知識を土台に、相手になりきり、悩み抜く。その濃密な時間を通じて、手法の習得を超えた「伴走者」としての確かな覚悟と自信が、受講者の皆さんの表情に宿っていくのを感じた一日でした。

## 認定こども園せんだい幼稚園 園長 田原 慎也

した。役割になりきりながら意見を出したり、他の受講者の話を聞いたりする中で、対話を支える難しさと同時に、非評価・非操作という姿勢を保つことの難しさを身をもって感じました。理解しているつもりであっても、自身の保育観や経験が無意識のうちに言葉や関わりに表れることに気づかされ、コーディネーターという立場のあり方について、その目的を見失わずに関わる重要性和難しさを感じました。

これまでECEQ<sup>®</sup>の公開保育に参加する立場でしたが、今回の養成講座を通して、実施園が自走していくために、見えないところで丁寧に伴走するコーディネーターの存在を強く意識するようになりました。その役割の重みを受け止めつつ、地区のコーディネーターの先生方からも引き続き学びながら、幼児教育の質の向上と発展に少しでも寄与できるよう歩んでいきたいと考えています。



一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構  
**第17回ようちえん絵本大賞**  
～新しい絵本を見つけよう～

大賞  
15冊が  
決定

第17回ようちえん絵本大賞は、“子どもに読み聞かせたい絵本”、“お父さん・お母さんにお勧めしたい絵本”、“幼児教育に携わる者だからこそ発掘できるまだ多くには知られていない素晴らしい絵本”を選考の基準として、(一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・広報委員会が過去おおむね8年以内には出版された絵本の中から選考を行いました。その結果、特別賞3作品を含む15冊が絵本大賞に選ばれました。

広報委員一同、これからも子どもたちと絵本との出会いの一助となるよう努めてまいります。なお、参考までに広報委員会が絵本の紹介文を記載させていただきました。

### 第17回ようちえん絵本大賞 受賞一覧

	絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
特 別 賞	(一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 <b>理事長賞</b>  <b>山のフルコース</b> はらぺこめがね (作) 小学館	ここは山の奥の奥のレストラン。その名前は「RestaurantYama」。メニューは「山のフルコース」のみです。お客さんがやって来ました。窓から見えるのは美しい山並みです。これから長い長いフルコースの始まりです。四季折々の山の絶景が絶品料理として振舞われます。ゆっくりたっぷり時間をかけてお召し上がりください。
	<b>広報委員長賞</b>  <b>うみへやまへ</b> 三浦太郎 (作) 偕成社	山あいに住む「ぼく」は家族と白い車に乗り父親の生まれた海辺の家へ出発します。牧場を越え、田んぼの一本道を通り、街を過ぎて橋を渡ったら、白い灯台見えるかな？山から海へと向かう道中の風景を色彩豊かに描きます。そしてこの絵本にはもうひとり主人公がいます。本を後ろから開くと、海辺に住む「わたし」が赤い車に乗って母方の祖父母を山のふもとへ訪ねるお話が始まります。前からと後ろから、ふたつのお話が楽しめます。
	<b>こどもがまんなかしんぶん賞</b>  <b>わすれていいから</b> 大森裕子 (著) KADOKAWA	生まれたときからいつも一緒の「おまえ」。でも大きくなるにつれていないことが多くなった「おまえ」。少年の成長を見守る一匹の猫に母親や父親としての自分の姿を重ね合わせて、胸が熱くなる読者は多いのではないのでしょうか。いつかは旅立っていく子どもの成長に惜しみなく注がれる愛情が絵本の中からこぼれ落ちるような、そんな想いにさせる一冊です。

絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
<p><b>バーナバスの だいたっそう</b></p> <p>ファン・ブラザーズ (作) 原田勝 (訳) Gakken</p>	<p>バーナバスは生まれた時からずっとペットショップ「パーフェクトペット」の地下にある「人工ペット研究所」で暮らしています。可愛く作られた生き物は、新しいペットとして地上のペットショップで売られます。半分ネズミで半分ゾウのバーナバスは〈失敗作〉として失敗作がたくさん並ぶ地下の部屋に入れられています。作り直される運命の仲間達と地下室からの脱走を試みますが、バーナバスの運命やいかに。</p>
<p><b>こどもかいぎ</b></p> <p>北村裕花 (作・絵) フレーベル館</p>	<p>今日はこどもかいぎの日。お題は「おこられたときはどうしたらいいか？」です。それぞれの体験談や意見をもとにどんどんと会議が進んでいきます。ヒートアップしすぎて、とうとう喧嘩が始まってしまいました。さて「おこられたときはどうしたらいいか？」会議ではどのような答えを出すのでしょうか。子どもならではの発想や意見に満ちあふれた一冊で、子どもの世界を堪能できる絵本です。</p>
<p><b>わたしはここがきにっています</b></p> <p>あまのかんな (著) ビルボ</p>	<p>静かで落ち着く場所が好きなごろんくんが気に入っている場所は大きな木の下。一度は断るものの、友だちに誘われ川へ行くと、川の中で見たこともない美しい世界に感動します。今度は、土の中へ行くと、もぐらのミュージシャン達がすてきな音楽を奏でていました。さあ、次はどこへ行くのでしょうか。最後には、ごろんくんの正体が明らかになり、性格まで変わるといってお話です。温かいストーリーで、ごろんくんを応援したくなる一冊です。</p>
<p><b>ガラガラ がらくた!?</b></p> <p>エミリー・グラヴェット (作) なかがわちひろ (訳) BL出版</p>	<p>森で一番高い木に巣を作っているカササギのメグとアッシュ。もうすぐ可愛いヒナ達が生まれるのです。なんて可愛い水色のたまごが4つ！完璧です。でも巣の方はなんだか物足りない？ヒナのためにいろいろなものを揃えていきますが…。愛情たっぷりの親鳥達ですが、本当に大切なものは…。に気づいてくれてほっとするお話です。動物達やモノが丁寧に色鮮やかな色彩で描かれているのも魅力です。</p>
<p><b>できるよ できるよ</b></p> <p>ブリッタ・テッケントラップ (作・絵) 木坂涼 (訳) ひさかたチャイルド</p>	<p>大きなハリネズミと小さなハリネズミ。二人が朝起きると庭に落ち葉がいっぱい！「さあ、庭掃除をしよう！できるかな？」と大きなハリネズミ。「できるよ、できるよ」と小さなハリネズミ。なんでも小さなハリネズミはやってみますが、できないこともあるのです。それから他の動物達に出会って、「みんな得意なこと持ってるんだね」と小さなハリネズミは気づきます。ちょっと嬉しくなるお話が美しい絵と共に繰り広げられます。</p>
<p><b>ぷるるのちょこっとちがう</b></p> <p>クレア・アレクサンダー (作) くぼみよこ (訳) 化学同人</p>	<p>ずらりと並んだぷるる達、今からとっておきをお見せします、みんな揃ってできるはずが…。なんだか一人だけちょこっと違います。みんなに「変なの」って言われて、一人でしょんぼりしていると、「大丈夫、素敵だよ」と言ってくれる友だちもいて…。みんなと同じじゃなくてもいいんだよ、と優しい気持ちにさせてくれる絵本です。</p>
<p><b>おなじそらのしたで</b></p> <p>ブリッタ・テッケントラップ (作・絵) 木坂涼 (訳) ひさかたチャイルド</p>	<p>落ち着いた色彩が気持ちを穏やかにしてくれます。短く詩的な言葉がハート型やしずく型、雲や風の切り抜きの中に納まると、一層響いてきます。「おなじそらのしたで」誰かと出会い、遊び、歌い、そして時には嵐にもあいます。それはみんな同じ。空を見上げた時、誰かとつながっているような気持ちになることを教えてくれたような気がします。</p>

絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
<p><b>じゅんばん じゅんばん</b> <b>じゅんばんですよ</b></p> <p>accototo ふくだとしお+あきこ (作) 大日本図書</p>	<p>四季折々に移り変わっていく自然。森羅万象はそれぞれ独立して存在するように見えて、実はすべてが繋がっている。それらにはちゃんと順番があり、法則があり、季節はまるでバトンを手渡すようにリレーしていく、ということ、美しい絵とそぎ落とされた詩的な言葉で紡ぐ絵本です。</p>
<p><b>ゆきのこえ</b></p> <p>おーなり由子 (文) はたこうしろう (絵) 講談社</p>	<p>日本列島は南北に長く雪の少ない地域もありますが、この絵本を通じてきっと、雪への興味がわいてくるはず！雪国の子も達は、そうそう雪ってこんな感じ！となるでしょう。四季のある日本です。子ども達には季節の変化や自然の現象に気づききっかけになったらいいなと思える一冊です。</p>
<p><b>ぼくのすみっこ</b></p> <p>ジヨオ (作) かみやにじ (訳) ほるぷ出版</p>	<p>すみっこが好きな人は案外多いものです。そんな人の本性をついた絵本。部屋のすみっこでゴロゴロしていたカラスが初めにやったことは椅子を入れること、それから本棚と小さな植物持ってきます。心地よいすみっこにするためにあれこれ手を加えて、出来上がった空間は、素敵、素敵。細長い絵本のサイズに描かれる構図はなんとも魅力的で、言葉はなくてもすみっこの世界に引き込まれてしまいます。</p>
<p><b>月虫の姫ぎみ</b></p> <p>富安陽子 (文) 五十嵐大介 (絵) 講談社</p>	<p>「かぐや姫」の物語を別の視点でリメイクした作品です。かぐや姫が「月虫」という昆虫であるという前提のもと、幼生の間は美しい姫君の姿になっています。虫ですからどこの誰に求婚されても全く興味がありません。やがて繭をつくり、十五夜の満月の夜。繭は破られ美しい一匹の月虫として生まれ、新しい羽根を伸ばして月へと飛び立っていきました。ちょっとしたSFホラー作として生まれ変わった絵本です。</p>
<p><b>いちごりら</b></p> <p>麻生かづこ (作) かねこまき (絵) ポプラ社</p>	<p>思わず頬がゆるむ、不思議で愛らしい世界が広がる絵本『いちごりら』。くすっと笑えるユーモアの奥に、やさしさや友情の温もりをそっと忍ばせています。「ちょっとちがう」からこそ生まれる楽しさや安心感が、読む人の心に静かに届く一冊。小さな子どもはもちろん、大人の心もやさしく包み込みます。どこに置いても、表紙の『いちごりら』とふと目が合う…そんな不思議な魅力も、この絵本ならではです。</p>

## 令和8年度賛助会員（園児の保護者等）入会について

「まなびの広場」をお手に取っていただいております先生方には、当機構の諸事業に対しご理解ご協力を賜り感謝申し上げます。

当機構の賛助会員の御礼として配布しております「こどもがまんなかしんぶん」は、令和4年度より開始したデジタル配信をはじめ、現在、幼児教育の大切さをはじめとした掲載情報の充実化を図り、多くの方に反響をいただいております。

【こどもがまんなかしんぶんについて】

■会費：1口・年間250円

■入会特典：年10回（紙媒体6回、デジタル配信4回／8月と3月を休刊予定）

令和8年度の賛助会員入会申込書は、順次各園に郵送していますので、ご確認いただけますようお願いいたします。

これからも子どもたちが幼稚園・認定こども園、ご家庭で過ごす時間がより豊かになりますよう事業をおこなってまいりますので、是非ご活用いただけますと幸いです。皆様のご入会を心よりお待ちしております。



## 令和7年度全国教育研究担当者会議の開催

令和8年1月27日、アルカディア市ヶ谷私学会館において、全日私幼連と全日私幼研究機構の令和7年度全国教育研究担当者会議が開催されました。

本会議は、全日私幼連と全日私幼研究機構が連携を図りながら全国の私立幼稚園や私立幼稚園由来の認定こども園の支援を通じて幼児教育の振興や質向上に取り組んでいることから共同で開催され、全国の教育研究担当者、100名の方が参加し、講演・報告が行われました。

はじめに尾上正史全日私幼連会長及び山西幸子全日私幼連副会長より開会のあいさつが行われた後、宮下友美恵全日私幼研究機構副理事長より趣旨説明が行われ講演・報告が以下の通り行われました。

〔講演〕

『「かしこい手と器用な頭」地球で生活する祖先としての私〕

安家周一 全日本私幼研究機構 理事長

〔報告〕

「教育研究委員会研修チーム・オンデマンドチーム・システムチームからの報告」

岡本潤子 全日私幼連教育研究委員長  
全日私幼研究機構教育研究委員長／  
研修チーム長

川原恒太郎 全日私幼研究機構ゆたかなまナビオンデマンドチーム長

野波雅紀 全日私幼研究機構ゆたかなまナビシステムチーム長

〔報告〕

「第三者評価としてのECEQ<sup>®</sup>」

藪淳一 全日私幼研究機構ECEQ<sup>®</sup>・評価チーム長  
〔グループワーク①〕

事前に配信された下記内容を受け、各地区の研修の現状や課題について。

①講演：「これからの幼児教育への期待と課題：OECD Teaching Compassと最近の国の動向から」

秋田喜代美氏 学習院大学文学部教育学科／  
人文科学研究科教育学専攻教授

②鼎談：「これからの保育者養成について」

秋田喜代美氏 学習院大学文学部教育学科／  
人文科学研究科教育学専攻教授

加藤篤彦 全日本私幼研究機構専務理事

岡本潤子 全日本私幼研究機構教育研究委員長

〔グループワーク②〕

グループワーク①の内容を受け、今後の研修の展望について。

本会議では、グループワークも織り交ぜながら意見を交わすことができ、川名マミ全日私幼研究機構副理事長の閉会あいさつで終了しました。

第17回 \ 対面で実践学会を実施します！／

# 幼児教育実践学会

対面研修で保育実践を語りあい、対話の中から学び、自身の保育を深めましょう。是非ご参加ください。

日時・会場 2026年 8/20(木) 21(金)

京都府 京都華頂大学  
〒605-0062 京都府京都市東山区林下町3-456

定員 900人 参加費 8,000円

テーマ 「創りだそう！こどもの未来を拓く、良質な乳幼児期の教育を届けよう！こどもと共に生きるよろこびを」

8月20日：基調講演・園内研修のメイキング  
21日：口頭発表・ポスター発表

第1次案内について

（各都道府県団体事務局から各園へご案内いたします）

**口頭発表・ポスター発表で各園の実践発表を大募集しています**

実践発表の申込期間について

- 口頭発表①地区代表≪11発表≫ 4月24日（金）17時  
②地区代表以外≪先着19発表≫ 3月23日（月）9時～4月24日（金）17時
  - ポスター発表（園・個人）≪先着50発表≫
  - ポスター発表（研究者）≪先着10発表≫
- 3月23日（月）9時～5月29日（金）17時

第2次案内について

5月中旬以降「参加申込」のご案内をいたします。

